

[概要]

1970年代に入り、人文主義地理学の台頭とともに質的な調査を用いて場所の意味や価値を解釈しようとする研究が西洋で盛んに行われている。西洋の動きをうけて、日本でも場所愛着が形成されることによって同じ地域に住み続けるという研究がなされた。しかしながら、西洋ではない日本において、西洋の個人主義的な考え方である場所愛着だけ住み続けの要因を十分には説明できない。日本には、東洋特有のイエ意識が働くことによって住み続けを促進すると考えられる。よって、本研究では、日本における住み続けの要因が、場所愛着とイエ意識によって構成されるのではないかという仮説を検証し、日本における住み続けの枠組みを明らかにすることを目的とする。調査対象者として、イエ意識がより濃く出る結婚移住の寡婦の高齢女性とした。調査対象地を富山県氷見市中波に設定し、「ライフヒストリー」を軸とした聞き取り調査を行った。結果として中波に住む高齢女性は、外部から閉鎖的な集落に移住したことによる場所愛着とは言い難い複雑な心情を持ちながら、住み続けることを選択していた。中波に対して愛着では定義できない複雑な心情を持ちながら住み続ける理由として最も大きな位置を占めていると思われたのは、東洋特有のイエ意識であった。イエ制度の下で生まれたイエ意識は、長男と結婚した対象者が強く持ち合わせていたものであった。イエ意識が強いことから、対象者たちは頼りにしていた旦那が他界した後、義理の家との関係しか残っていない地域に住み続けることを選択していたことが明らかになった。中波の事例から、西洋の研究を参考に日本における住み続けの枠組みを考える際に、西洋の枠組みでは説明しきれない日本の文化的背景を考慮することが必要であることが明らかになった。

キーワード：イエ意識，内部性，場所愛着，高齢者，ライフヒストリー